



シモマッチの 校長随想

～教育は過去からの贈り物、そして未来へのメッセージ～

下町壽男 盛岡中央高校附属中学校副校長

第31回

長寿先進者に学ぶ

□ シニア向け講演会から

以前、花巻シニア同窓学院で講演したことがありました。シニア同窓学院とは、60歳以降に花巻市シニア大学で12年間学んだ同窓生の集まりです。メンバーは60人ほどですが、最も若い方で72歳、最高齢の方は92歳でした。

「高齢化社会から長寿恩恵型社会へ」というテーマで話をして、その後いくつかのワークを行いました。そのワークの一つは、自分の進路に疑問を抱く高校生や、定年退職後の人生設計に悩む会社員に対して「あなたならどんなアドバイスをする？」というものです。では二つほど例を紹介しましょう。

〈16歳夢見る男子高校生B君〉

僕は、将来何になるかまだ決めていません。まわりの大人は「将来は今ある仕事がなくなくなり、変化する」とか「人工知能に仕事がとられる」という話ばかりします。なので、これからどんな未来になるかわからくて不安です。

アドバイス…人でなければできない仕事、人であればこそできる仕事もあるはずですよ。それを、時間をかけて見つけてみては？ あなたにはたくさん時間があります。

アドバイス…失敗を恐れないで勇気をもって新しいことに前向きに歩んでください。そして楽しむことも大切だと思います。私は今92歳ですが、「引っ込み思案にならない」ことをモットーに今もいろいろなことチャレンジしています。

〈18歳堅実な女子高校生Aさん〉

私は、先生に言われた通り課題を出し、きちんと勉強し、そして大学に行き、将来は公務員になって、その後結婚してつましい生活を送りたい。そんなささやかな幸せを願うだけの私に、主体的に生きるとか、イノベーションを起こすとか、社会のために何かをするとかなんて考えられません。

アドバイス…あなたの考えはとてもよくわかります。それはいいことだと私も思います。でも、私は「もったいないなあ」とも思います。あなたにはもっともっと楽しく

充実した人生を送る可能性があるのに、最初から狭めてしまうのは「もったいない」と思うのです。私はあなたにたくさん本を読んでもらいたいと提案します。それが、あなたの視野を広げ、新しい自分を見つけるきっかけになるかもしれません。

いやあ、素晴らしい。さすが長寿先進者ならではのアドバイスの数々に感心しまくりでした。

□ 高齢者から学ぶことの意義

講演後、花巻シニア同窓学院プログラムディレクターのSさんから、次のようなお礼状をいただきました。

〈前略〉 これまでも人生百年時代をテーマに学習を深めてまいりましたが、今回の先生ほど、コンテンツが豊富でクオリティの高いおはなしは初めてのような気がします。人生百年ライフのイメージはなんとなくぼんやりと想像できるのですが、先生のおはなしをお聴きして、その漠とした世界にひとすじの光明をみる思いがいたしましたし

た。ジグソーパズルではないが、一つひとつのパーツをあてはめていくことによって、人生百年時代の全体像がフェードインされてくる。そんな確かな説得力がありました。〈中略〉

さて、2011年5月、東日本大震災の年にたちあげたのが「シニア同窓学院」です。12年間のシニア大学ライフを経験した学生たちにとって、卒業したあとも、なんらかの学びのステージがほしい。そこで生涯現役で健康長寿をねがう卒業生有志が、一念発起して創設したのが当学院でした。12年間の生涯学習活動によって、彼らは学びの主体者としての豊かな力量をたくわえ、同窓学院という自主自立の草の根学習集団を誕生させたのでした。その時点ですでに院生たちの平均年齢は75歳後半。まさに人生後半にさしかかった「長寿先進者」たちの百年ライフへの挑戦ともいえまじょうか。花巻市はまだ「百年ライフの生涯学習行政ビジョン」を描けないようですが、実態はすでに事実の方が先行しているように思います。人生後半にこそほんとうの学

びの醍醐味があるように思います。彼らにとっての学びとは何か。それはいつてみれば、To have（知識・技術・資格などを得る）より、To be（いかにあるべきか）という自己実現や価値観の創出です。先生のこのたびのおはなしの論旨は、まさに後者の部分にウェイトがおかれているように理解をいたしました。〈以下略〉

シニア同窓学院への熱い思いと、その活動理念に魂が揺さぶられました。「人生後半にこそほんとうのまなびの醍醐味がある」という言葉に勇気づけられ、また、私の話と同窓学院の存在意義を「To haveよりTo beという自己創出」とまとめられたことに強いシンパシーを覚えました。

より良い長寿社会を実現するには、遅れて長寿者になる今の若者たちが、現在の「長寿先進者」から学ぶ必要があります。その「長寿先進者」とは、今も学び続けている高齢者、まさに同窓学院のメンバーのような方々であるあと私はしみじみと感心したのでした。